

〈資料紹介〉

カープ関係寄贈資料

濱保 仁志(広島市公文書館歴史資料専門員)

はじめに

広島市公文書館では、平成二五(二〇一三)年度から市民に呼びかけ、カープ関係資料の収集・保存を行っている。広島カープは、原爆で焦土と化した広島再建の一翼を担うことを期待されて結成された⁽¹⁾。また、昭和二五(一九五〇)年の創設時には市民が株券を購入し、昭和二六(一九五一)年の球団存続危機の時や翌二七(一九五二)年の金山・小鶴両選手の獲得資金調達時のたる募金など、主に県内の人々による協力で支えられていたことから、広島市の歴史と密接に関わっている。しかし、今まで当館のカープ関係資料は旧市民球場管理事務所引継資料があるのみで、市民球場開設以前の広島カープ黎明期の資料はなく、またそれら資料は球団にも残されていない状況であった。そのため、被爆七〇年史編さん事業にあたりカープ関係資料の収集を行うことになった。

収集を開始した当時の主なカープ関係資料は、初優勝時の新聞等の刊行物、旧市民球場管理事務所引継資料の中に含まれる球団資料、平成二二(二〇一〇)年度以降、広島東洋カープから寄贈されたイヤークラップ等といった状況であったが、呼びかけに応じて、カープの前身である広島野球倶楽部関係資料から平成二八(二〇一六)年のリーグ優勝時の資料まで、約一、九〇〇点の資料を四一名の方からご寄贈いただいた。高校野球、社会人野球のものを含めると約二、〇〇〇点に及ぶ。

これらの資料については、今後当館のデジタルアーカイブ・システムに登録し、順次公開する予定である。本稿では、システムでの公開に先駆け、特に初期のカープに関する資料の一部を紹介する。

一 カープ創設期にかかわった人々

カープ創設期の資料については、このたび中国放送の藤原大介氏及び中国新聞社富沢佐一氏の仲介により、カープ創設期に重要な役割を果たした谷川昇、河口豪、津田一男のご遺族から、当時の状況が伝わる原資料が寄贈された。そこで、本稿では、この三者の旧蔵資料を紹介しながら、創設期のカープの姿をたどってみたい。

■創設当時の広島状況

広島に野球が入ってきたのは明治二二・二三(一八八九・一九〇〇)年頃とされ、明治三〇年代に入ると中等学校で野球熱が高まった⁽²⁾。大正期に入ると、大正四(一九一五)年に第一回全国中等学校優勝野球大会が開催され、広島地方予選では旧制広島中学校(後の広島第一中学校、現・広島国泰寺高等学校)と広島商業学校(現・広島商業高等学校)の試合が「広島早慶戦」と呼ばれるなど人気を博した⁽³⁾。その後、一九二〇年代には旧制広陵中学校(現・広陵高等学校)が、一九三〇年代には旧制呉港中学(現・呉港高等学校)が台頭し、群雄割拠の様相を呈した。また、中等学校野球の人気を背景に、町内や学校単位で少年野球も盛んとなり、さらに地域のクラブチームや実業団のチームも結成されるなど、「野球王国」広島を醸成していった⁽⁴⁾。こうしたこともあり、戦前の職業野球(後のプロ野球)では、巨人軍の田部武雄や白石勝巳、大阪タイガースの藤村富美男や小川年安、門前眞佐人、名古屋金鯱軍の濃人渉など多くの名選手を輩出した。昭和二〇(一九四五)年八月六日原爆が投下されたことにより、広島は壊滅的な被害を受けたが、昭和二二(一九四六)年十二月には、焼土と化した広島で早くもプロ野球チームの巨人軍とグリーンバークの練習試合が行われている⁽⁵⁾。グリーンバークには、広島出身の選手が多く、監督は後に広島カープ初代監督となる石本秀一であった。翌二二(一九四七)年に茨城県結城町在住で石本の広島商業時代の教え子でもある土手潔をオーナーに迎え、結城ブレーブスと改称して、国民野球連盟(国民リーグ)に参加するが、その年限りでリーグは解散した。広島でプロ野球チーム設立の機運が高まるのは昭和二四(一九四九)年四月に、読売新聞社社長で日本野球連盟総裁に就任した正力松太郎によって、プロ野球二

リーグ制構想が表明されたことが発端であった。全国的にプロ野球球団設立の動きが活発となる中で、広島総合大学設立資金募集のために同年五月二二日に大阪タイガース対東急フライヤーズの興行試合が行われ成功すると、広島財界・官界に地元広島でのプロ野球球団設立の機運が高まっていく⁽⁶⁾。その後の経過は後で詳述する。

ここで、広島カーブの略歴に触れておこう。昭和二十四年十二月に結成された広島カーブは、会社名を「株式会社広島野球倶楽部」と呼んだ。広島野球倶楽部は、株式を一般公募したが、運営資金が一年で不足したため、翌二六年三月には後援会を発足させて寄付金を集めることで、球団を存続させていくことになった⁽⁸⁾。しかし、昭和三〇（一九五五）年には球団財政の借金は五六三万五〇〇〇円まで膨らんでいたため、同年十二月十七日に「商法上」広島野球倶楽部を解散し、翌年一月二五日に株式会社広島カーブを設立した。この会社は、地元財界十社（二葉会）を中心に、総計二十余人の郷土出身の諸名士の寄付的出資によって設立された。この際、日本野球連盟理事会では河口豪が右記の事情を「名称変更」と弁明し窮地を脱した逸話も残っている⁽¹⁰⁾。昭和四二（一九六七）年十二月十八日、経営母体を東洋工業に一本化し、株式会社広島東洋カーブと名称を改称し⁽¹¹⁾、今に至っている。

■カーブと谷川昇

谷川昇は、明治二九（一八九六）年に広島県賀茂郡西志和村に生まれ、旧制広島第一中学を卒業後渡米して、大正十三（一九二四）年にハーバード大学大学院を卒業した。帰国後は内務省に入り、東京市役所（現・東京都庁）に勤務し、市民局長、都制施行後の防衛局長を経て、昭和二十年に山梨県知事に就任した。その後、内務省警保局長となり、昭和二二年に衆議院議員に初当選するが、間もなく東京市役所勤務時代に大政翼賛会に関する役職についていたことを理由に公職追放となった。

公職追放解除後、昭和二七（一九五二）年十月の総選挙で衆議院議員に当選するが、翌二八（一九五三）年三月に解散。その年の総選挙では落選した。昭和三〇年二月二八日実施の総選挙で再び当選するが、同日に急逝した⁽¹²⁾。これらのコレクションは、ご子息の谷川和穂氏が受け継ぎ、自宅で保存されていたもので

ある。

谷川は昭和二二年の公職追放の後、元金鯱軍代表の山口勲や中国新聞社東京支社通信部長の河口豪らと協力して広島野球倶楽部の創立に尽力し、創立準備委員会の委員長を務めている⁽¹³⁾。谷川はまた、チーム名「カーブ」の名付け親としても知られている。

広島カーブ設立前から関わっていたため、カーブ関係資料の中でも特に初期のもの（昭和二四〜二五年）が中心である。資料は全部で二九点あり、中には広島野球倶楽部のリーグ加盟願草稿、目論見書や創立趣意書、日本野球連盟への陳述書など、カーブ創設期の運営・収支関係資料が多く含まれている。このほか、広島県立第一中学校野球部の集合写真など、戦前の広島の野球史の一コマを伝える資料も含まれている。

■カーブと河口豪

河口豪は、明治三七（一九〇四）年四月一日に東京府で生まれた。旧制蔵前高等工業学校中退後、帝国通信社会部長、鉄道春秋主幹、中国新聞社東京支社通信部長、情報局委員、広島市政嘱託、セ・リーグ理事・同理事長、新日本リーグ理事長、株式会社広島カーブ代表などを歴任する。

カーブとの関わりは、中国新聞社東京支社通信部長時代に始まる。カーブ創設期に東京にあつて、主に連盟との連絡、他球団の選手獲得、資本金集めなどに奔走し、谷川昇と山口勲と共に広島野球倶楽部創設に尽力した。

設立後は昭和三五（一九六〇）年まで広島カーブ球団代表を務め、またセ・リーグ理事として日本野球連盟と広島カーブとの間で周旋を行ったことでも知られる。平成九（一九九七）年十一月十六日に死去した。資料は、ご遺族の河口脩氏が保存されていたものである。

河口豪資料は全部で四点であり、刊行物を除く二点はいずれも書簡である。一つは元広島市長木原七郎から河口豪に宛てた書簡（昭和三年のもので、近々実施される衆議院総選挙の旧広島二区の情勢について綴ったもの）、もう一つは選手獲得に奔走する広島カーブ初代監督の石本秀一が谷川昇に宛てたものである。次節では後者の書簡を紹介する。

■カープと津田一男

津田一男は大正八(一九一九)年に広島市で生まれた。旧制広島第一中学、旧制神戸高等商業学校(現・神戸大学)を経て、昭和二三(一九四八)年に中国新聞社へ入社する。運動部記者、広島野球倶楽部(広島カープ)の番記者として活動し、昭和三六(一九六一)年から運動部長に就任する。その一方で、昭和三一(一九五六)年からラジオ中国(現・中国放送)の野球中継の解説者も務めていた。昭和四六(一九七二)年からは、中国新聞スポーツ欄のコラム「球心」の連載を担当し、昭和五〇(一九七五)年の定年退職後は、取締役事業局長、顧問、中国新聞文化センター専務取締役等の役職を歴任し、昭和五九(一九八四)年十二月二六日に死去した。資料は死後、津田氏宅に保存されていたが、このたびご遺族の川西文江氏から、ご寄贈いただいた。

津田は、昭和二四年からカープの番記者として監督、選手等関係者の近くでカープの歩みを見守り続けた。コレクションも膨大で、時期としては昭和二四年から五五(一九八〇)年まで、全部で一、五二一点にのぼる。多くは『野球界』や『週刊ベースボール』等の野球雑誌、カープ関連の各種スポーツ紙だが、新聞記事スクラップ(九五冊)、各球団の刊行物(三二冊)など、日本プロ野球史にとって貴重なものも含まれる。

また、創設期の球団事務資料(昭和二五年二月三日付の「追加登録並背番号変更申請」)や日本野球連盟議事録など珍しい資料もある。さらに、取材で得たメモ資料が多数含まれており、その中には、これまで書籍等で紹介されてきた事実を裏付けることのできる貴重な情報を含むものもある。

二 カープコレクションの概要

前節で紹介した谷川昇資料、河口豪資料、津田一男資料の中から、広島野球倶楽部・カープの黎明期を伺い知ることの出来る資料を紹介しよう。

(一) カープ設立の経緯

今回収集したカープ資料の中で最も古いのは、資料一の「社団法人日本野球連

盟宛加盟願草稿」である。谷川は広島にあって、設立のための提出書類の文案作成、資金集めのための地元政財界や自治体への働きかけを行っていた。これを裏付けるのが次の資料である。

資料一 「社団法人日本野球連盟宛加盟願草稿」(谷川昇資料 仮番号6)

御願

今般下名等株式会社広島野球倶楽部(球団名カープス)の結成を發起し、曩に世界的平和都市としての甦生を宣言したる原爆都市広島再建の一翼たらむことを期すると共に、わが野球界躍進のため揮身の努力を傾倒致し度く決意するに至りました。就而去る九月十七日、口頭を以て貴連盟加盟方、特に懇請致して置きました。何卒至急御承認の上、御教導あらむことを茲に改めて御願致します。

昭和二十四年九月二十八日

広島野球倶楽部創立發起人代表

中国新聞社代表取締役

築藤 鞆一

広島電鉄株式会社専務取締役

伊藤 信之

東京都品川区五反田五丁目□□ 谷川昇

社団法人日本野球連盟 御中

これは、当館で開催したロビー企画展「文書と写真でたどる旧広島市民球場」でも紹介した、谷川昇や山口勲らによる広島野球倶楽部の新リーグへの加盟願草稿である。

昭和二四年九月四日、日本野球連盟総裁に就任した正力松太郎がプロ野球二リーグ制の構想を打ち出したことにより球界再編の動きが活発になった。構想の内容は当時の既存八球団に、新規四球団を加えた全十二球団を二リーグに分けるというものであった。この球界再編の動きの中で広島にもプロ球団を設立すると

いう機運が政財界で高まり、当時公職追放のため代議士の職を追われていた谷川昇が具体化させていくことになる。このとき谷川昇にプロ球団設立の話を持ちかけたのが、広島出身で戦前にはプロ野球チーム金鯱軍の元代表であった山口勲であった。谷川と山口は、中国新聞社東京支社通信部長の河口豪の協力も得て、プロ球団設立に向けて奔走することになった⁴⁾。

同年九月十四日の近鉄の加入申請以後、西日本新聞、毎日新聞、大洋漁業と新規球団加入申請が相次ぐ中、広島については、二三日にプロ球団を設置する意志表示が連盟に対してなされ、二八日、谷川昇を代表として、築藤輛一、伊藤信之の三名の連名により正式手続きがとられることが決まり、同日にセ・リーグから正式に参加承認の通告を受けた⁵⁾。

これは、正式手続きを行うにあたり下書きとして作成されたもので、所どころ修正箇所が確認できる。カープ側に残るものとしては、これが唯一であり、非常に貴重なものである。また、球団名の「カープス（カープ）」(鯉)がこの正式手続きの段階で決定していたこともわかる。

(二) 設立準備 資金集めと選手確保

創設期に最も大きな課題となったのは、資金集めと選手確保であった。次に資金集めに係る資料を二点紹介しよう。

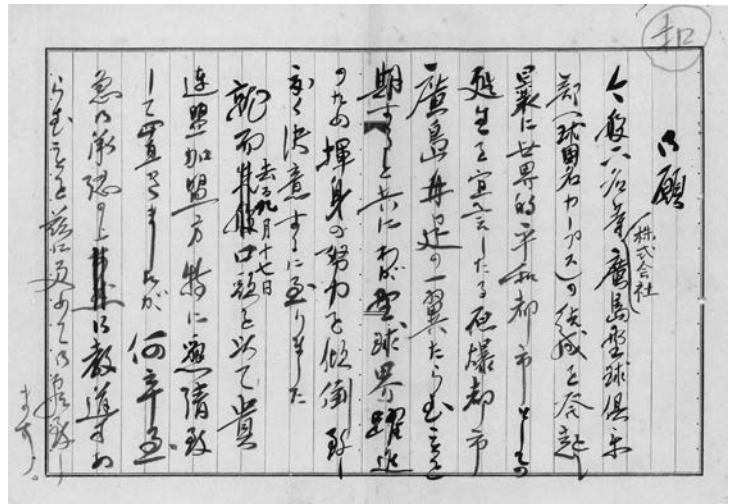


写真1 〔社団法人日本野球連盟宛加盟願草稿〕

■財界への呼びかけ

谷川資料の中には、設立趣意書が二点ある。一点は次に紹介する堅冊の「カープ広島野球団賛助芳名録」という資料の中に記されたものであり、もう一点は株式申込書に付随するものである。

資料二 「趣意書」(谷川昇資料 仮番号2「カープ広島野球団賛助芳名録」より)

趣意書

わが日本プロ野球は、過去十有余年の苦闘を経て漸く今日の興隆の波に乗るに至つた。殊に終戦後数年間に於ける再興はわが国民大衆健全娯楽の王座を確保し、今又第二飛躍期に入り、セントラル及びパシフィックの二大リーグ制を採ること、なつた。

郷土広島は、従来球界名門の地として最も多数の優秀野球人を輩出すると共に、フアン熱意又頗る旺盛なるものがある。地の利も亦他に優ること甚だ多い。就中原爆によつて荒廢に歸した水郷広島も、特別平和文化都市として將に再発足せんとしてゐる。此の時に當つて広島プロ野球チーム結成の要望期せずして各方面に起り、その結果茲に広島カープ軍の誕生を見るに至つたのである。かくしてわが広島カープ軍は、郷土全広島の後援と輿望とを担ひ、広島再建の先驅として革新期に入つた野球界に奮闘大いに飛越せんことを期してゐる。

蓋しプロ野球の使命は今后一段と重要を加ふること必須であるが、其の活動運営は寔に容易ではない。広くフアン各位の理解ある後援と同情ある指導とがなければ到底所期の目的を達成することは至難である。幸にして郷土にあつては、県市一般挙げて熱烈な後援を寄せつゝ、あることは深く感銘に堪えない。

茲に在京の郷土関係諸賢に於かれては、何卒絶大の御賛助と御指導とを賜らむことを懇請申上げる次第である。

昭和二十四年十二月五日

カープ広島野球倶楽部

創立委員一同

広島は、昭和二十四年十一月二八日に谷川と河口が巨人軍代表・読売新聞副社長の安田庄司からセントラル・リーグ参加承認の通告を受けた。年内にチームを結成するため、早速、広島で十二月五日に創立準備委員会の発会式を行うことが決まった。谷川は十二月三日に広島入りし、伊藤信之(広島電鉄専務)と山本正房(中国新聞社専務)らと会談し、監督として元阪神、大陽ロビンスの監督を務めた石本秀一を招聘することを決定し、同日に石本に就任依頼の電報を発している。

十二月五日、広島商工会議所で発会式が行われ(結成披露式は翌二五年一月十五日)、株式組織を設立するための創立準備委員が決定した。⁶⁾

この趣意書は、芳名録の一部に記されており、株式申込書にある創立趣意書と比べて「原爆」や「特別平和文化都市」、「広島再建」といった広島復興に関する語が目立つ。また、後半には「在京の郷土関係諸賢」へ賛助と指導を仰いでいることから、在京の郷土関係者向けの趣意書であろう。東京で結成式を開催することを予定して作成されたものと推察される。なお、芳名録となっているが、名簿部分には記入はなく、未使用のものである。

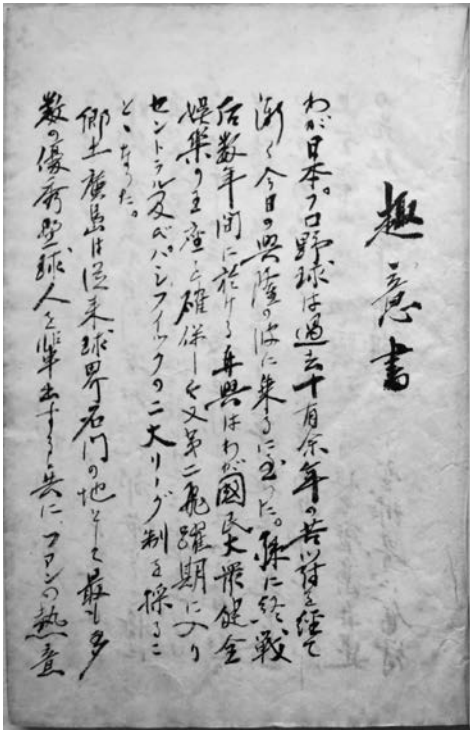


写真2 趣意書

■地元地方自治体への呼びかけ

昭和二十四年十二月九日、広島商工会議所の一室に「カープ広島野球倶楽部」の看板が掲げられて本部が設置された。資本金は一般公募としていたが、当初は大部分を地元の自治体や縁故による援助でまかなう計画であった。⁷⁾加盟後初めてのシーズンとなる翌二五年、カープは、球団資本金を確保するため県下五市に協力を要請した。

次に紹介するのは、カープ及び谷川昇から行なわれた地元自治体への働きかけ、そして各自治体の対応を伝える資料である。広島野球倶楽部設立に関する呉市議会への請願書・創立事務所や谷川からの依頼、他市町村への照会・回答など設立支援に関する一連の文書をまとめた綴で、いずれも広島県の野紙に手書きで写されている。

資料三 「株式会社広島野球倶楽部設立について協力方に関する請願」

(谷川昇資料 仮番号11)

拝啓迎春之候、貴下益々御隆祥の御事と拝察致します。

此の度は、御多忙中の処を色々とお骨折り下さいますして誠に有難く深く感謝致して居ります。

就きましては、かねて御願ひ致してあります新株式申込みの件ですが、その後御地の様子如何でございませうが、誠に申し兼ねますが御知らせ下さい。

尚御地の株式申込数と金額並にその引受者の氏名住所、それに既に仮受領書発行の分は、その枚数及び金額等、至急御一報下されば幸甚に存じます。

今月十日頃迄には一応確かな所を知る必要上からも、御願ひ致す次第で御致します。

更に今後御迷惑の事とは存じ上げますが、一層の御助力の程を御願ひ致し、合せて漸次御地の様子を御報告下さる様重て御願ひ致します。

敬具

昭和二十五年一月六日

呉市役所総務部

浜本 殿

カーブ広島野球倶楽部創立事務所

(後略)

これは、広島野球倶楽部創立事務所から呉市に対し、資本金確保のため公募した株式の申込状況の報告を依頼する文書である。この件に関しては、別途一月二〇日付で谷川から呉市長鈴木術へ協力要請依頼が送られている。呉市は市議会
で援助・協力要請への対応を協議し、県下各市の対応を調べるため、広島市・尾道市・三原市・福山市へ照会を行うことにした。ここでは、広島市の対応について
見てみることにしよう。

広育甲第五八号

昭和二十五年二月八日

広島市長 浜井信三

呉市長 鈴木術殿

株式会社広島野球倶楽部援助に関する件回答

一月十一日附呉経商第二〇号により照会のあった首標の件については、
本市としては援助致しますが、具体的方針は決定しておらず、現在市
議会関係委員会に於て、審議続行中に付決定次第通知致します。

資料のとおり、このとき広島市は、支援するが具体的な方針は決定しておらず
審議中であつた。同年五月二六日に開催された市議会において浜井信三市長は、
もし広島市が支援を拒否すれば「頓挫いたして球団が瓦解する」かもしれず、「一
時資金を立替える意味」において出資し、「将来速かにこの株を他に譲渡する方法」
をとることで出資を可能とし、県側と交渉して「入場税等の還元」⁸⁾をしてもらう
ことで、出資額の回収を図る方針である旨を答弁している。

なお、資料に残る同年二月時点のその他の市の対応は、福山市は市としての出
資額は百万円程度を予定しているというもの、三原市は一企業へ出資することに

については、市会で反対の空気が強いので目下の方針は決定していないというもの、
尾道市はいまだ具体的な方針が決まっていないというものであつた。

この広島市の方針を受けたものなのかは判然としないが、各市連名の広島県知
事あての陳情書の雛形が本資料に含まれている。

陳情書

^{さき} 曩に結成された株式会社広島野球倶楽部（球団名広島カーブ）は目下
設立中でありまして、これが設立の如何は県下一般の体育の向上発展
に影響する所、大なるものがあると考へられますので、下名五市に於
きましては出来る限り、これが設立に協力致し度いと存する次第であ
ります。

然しながら、現在の財政事情を以てしましては極めて困難な状態にあ
ることは貴職において充分御承知の通りであります。

つきましては、右事情御明察の上、県下において行はれる試合から生
ずる入場税の五割額を補助金等の形に於いて、体育奨励の経費として
五市に還元交付されますやう特別の御配慮を願います。

右陳情いたします。

昭和二十五年 月 日

呉市長

福山市長

尾道市長

三原市長

広島市長

広島県知事 楠瀬 常猪 殿

同時期の六月二七日に広島県が五百万円の出資を決定している¹⁹⁾広島市以外の
各市については、同年八月十六日に福山市議会で七〇万円の出資を議決したこと
が報じられており、²⁰⁾最終的には、五市の出資も決まり、これら自治体の出資決

定により、カープの資本金の資金繰りについては一応目途がついた。創立時の資金集めの一つの側面を伝えるものとして興味深い資料である。

■選手確保と開幕準備

選手確保とそれに要する資金調達も大きな課題であった。次に紹介するのは、昭和二十四年十二月に、カープの選手獲得に奔走する石本監督から谷川昇宛に送られた手紙(消印昭和二十四年十二月二十八日)である。当館へは河口家から寄贈された。東京での選手集めや資金提供のため、谷川から在京の河口に送られたものと推察される。

資料四 「谷川昇宛石本秀一書簡」(河口豪資料)

二十八日

谷川 昇 殿

石本 秀一

拝啓 前略御免下さい

昨日松山にて黒川投手と契約を結び、また中山投手の外一名捕手の話を大体纏め、来る正月四日頃、今一度参上して契約を完了する手筈に致し、今十時の汽車にて上京、月末までに予約した選手の契約を完了して東京方面を打ち切りの予定です。

残る問題は白石選手のみにて、本人が正月広島に帰る手筈に致し居ることゝて、一月十日までには全部予定通り完了の筈です。

次に練習は十日の予定にしておりましたが、十五日を振出しに勢揃するこ

とにしてあります。

それまでにグレイ(黒)のユニホーム三十着、予備五着、合計三十五着と靴(十文半、十一文、十一文半)を三種位に別け、三十足を用意するやう手配願ひます。バットは広島では駄目と思ひますので、東京から送らせねばならぬと思ひます。

大体今までに契約金として三百三十五万円、トレード金(阪急)六十万円を支出し、十三名の契約を終りました。残る選手に対し、白石選手を別にして約三百五十万円入用の見込です。

此の手紙着き次第、大阪へ百万円、東京へ百万円大至急にて発送願ひます。東京へは月末まで滞在予定ですから、遅くとも、卅日に入手せねば選手の契約を完了出来ません。取急ぎ御手配願ひます。

この年のオフシーズンには大阪タイガースが若林忠志投手、別当薫選手を引き抜く費用に約三百万円を費やした⁽²¹⁾のに比べ、広島カープはチーム全体の選手獲得費用が三三五万円、さらに石本の広島商業時代の教え子である浜崎真二が選手兼任総監督を務めていた阪急ブレーブスとの選手獲得トレード資金の六〇万円であり、他チームよりも厳しい財政事情だったことが伺える。その獲得費用も用意するのが難しい状況が手紙の後半に綴られている。

選手獲得については、資料中にも登場する松山商大の黒川浩投手など地方の若手選手や、旧制松山商業学校を経て名古屋金鯱軍や大陽軍で活躍した中山正嘉投手などベテラン選手を獲得せざるを得なかった。ただし、かつて石本が監督を務めた大陽ロビンスの辻井弘選手、田中成豪選手、黒木宗行選手を移籍させることに成功した。さらに、先述した阪急ブレーブスからは内藤幸三投手、岩本章選手、武智修選手、竹村元雄投手、阪田清春捕手を譲り受けるなど、石本の人脈によって十六名を獲得した。

なお、地元出身の白石勝巳選手獲得については、河口豪が読売新聞運動部長の宇野庄治を通じて読売新聞副社長の安田庄司を口説き落とし、巨人軍球団代表の四方田義茂の了解を得るという根回しを行ったとされる⁽²²⁾。

昭和二五年一月十五日のチーム結成披露式には二五名しか揃わず、連盟に提出する選手名簿の五〇名にはまだ達していなかった。翌十六日からは入団テストを行い、長谷川良平投手や長谷部稔捕手などまだ無名の若い選手と契約し、五〇名を確保するに至った⁽²³⁾。

(三) 運営の危機

こうして昭和二五年三月、広島野球倶楽部は、プロ野球セ・リーグの球団としてスタートを切ったものの、初年から資金繰りに苦しみ、同年末には球団存続の危機を迎えている。その状況を伝える資料として、津田一男資料の日本野球連盟(現・日本野球機構)「理事会決議録」から、翌二六(一九五二)年三月二十八日、

四月五日の両日に理事会で議題となった一九五一年シーズン第一節の日程延期問題の部分を紹介しよう。

この件については、当時津田が「中国新聞」に記していることから、取材のため入手し、記事の資料として用いたものと推察される。

■資金不足と合併問題

資料五 「理事会決議録」(津田一男資料 仮番号9)

昭和廿六年三月廿八日午後四時、東京都中央区、自動車会館

〔に〕 於て開く。 出席者左の如し。

〔松〕 島、中村、猪子、宇野、今泉、木下、田中、〔富〕 樫、赤嶺、小島、野口、徳永

〔議〕 事左の如し

(中略)

二、広島カーブに関する件

責任ある代表者との十分な協議ができるまでは二節までの既定の日程を延期する。檜山代表に召電を発すること。

事の発端は、カーブの経済的行詰まりであった。カーブは昭和二五年末にはすでに選手への給料の未払いや遅配が起きており、同年十二月二五日には球団の重役会を開き、強化費三百万円をチームの再建策を確立することを声明で発表した。しかし、翌二六年になっても経済的状况は好転することなく、三月十三日午後球団側は経済的状况が絶望的であると判断し、在京中の永野重雄代表らに依頼して、セ・リーグ顧問の鈴木龍二に「チーム存続の一切を」委任した。鈴木は広島と大洋の合併を模索していた。翌十四日に開かれた役員会では、大洋との合併案が一旦決まったが、石本が後援会結成による球団存続を提案したことで議論は一転し、素直に県民へ厳しい経済的状况を伝え、後援会の結成・寄付の募集など、その協力を得ることで厳しい局面を打開していくことで方針が決定した。²⁴

三月十五日、甲子園球場で行われる准公式トーナメントのため上阪した鈴木と

球団の横山周一監査役、石本監督、河口代表代理が日本野球連盟関西支社において会談し、球団側は合併をせず継続させていく意思を鈴木へ伝えた。また、具体的な再建方策については、三月二四、五日頃に池田勇人後援会長(当時蔵相)と永野重雄代表が連盟側立会いのもとで協議することとなった。鈴木は十五日に甲子園選手控え室を訪れ、チーム継続の了承を伝え、「広島カーブに対する地元ファンの愛着を無視してまで合併を促進しなければならぬ理由はない。石本君から選手側の意向を聞いたがチームの存続を希望する声が強いようだ。セ・リーグとしては当初の予定通り七球団でペナント・レースのスタートを切る」と語った。²⁵

しかし、数日後に連盟側は急遽先述の鈴木談話の内容を反故にした。球団側が連盟側が要求した地元を除外した過密な試合スケジュールを受け入れたにも関わらず、安定的に試合を行なうためさらに六百万円の拠出金を要求したのである。十五日の鈴木談話と「全くくつがえっている」ため、球団側は二八日の代表者会議に出席しなかった。²⁶ このことが問題となり、資料のとおり第二節までの公式戦日程を認めない「日程延期問題」が起こったのであった。

連盟の通告を受けて、檜山袖四郎球団社長は三〇日に広島商工会議所内で重役会を開き、「広島としてはあくまで既定方針通りやってゆく。檜山社長が上京し連盟首脳と話合う」ことで決定した。²⁷ 翌三一日、檜山は上京し、「連盟当局者や在京出身の有力者にも積極的に当り」²⁷ 四月二日に東京木挽町の日本野球連盟で松島鹿夫セ・リーグ会長と会談した。内容は不明だが、この会談により、球団側と連盟側は折り合いが付き、第二節四月七日の対阪神戦から試合が行えるようになった。

昭和廿六年四月五日午前十一時、東京都中央区、日本野〔球〕連盟別室にて開く。出席者左の如し。

〔セ〕ントラル 松島鹿夫、田中義一、木下検二、猪子一〔到〕、河口豪、伊藤貴一、森三郎、宇野庄治、鈴木龍二、野口務

(中略)

二、広島カーブに関する件

松島会長より、広島カーブの檜山社長、宇田代議士、大平蔵相秘

書官と、当方より松島、鈴木常任顧問、赤嶺総務と四月二日、連盟別室にて会見した。結果につき報告あり。これを了承する。

(後略)

この日本野球連盟の議事録には他にも西日本パイレーツ合併問題に関する事項やフランチャイズ制導入にあつての協議決定事項など貴重な情報も含まれており、日本プロ野球二リーグ制黎明期の複雑な動きを知ることができる。

(四) 旧広島市民球場建設とカープ

旧広島市民球場は昭和三二(一九五七)年七月二二日に開場した。開場の経緯については本紀要の展示報告に譲るが、同年二月に起工した第一期工事費用の大部分は、地元広島の有力企業十社で構成される二葉会からの寄附一億六千万円によりまかなわれた。⁽²⁸⁾

この資料は「覚書」・「寄附願」・「第二期工事寄附受納並びに寄附願寄附受納について」の三枚を仮に綴じたもので、広島市との間で正式に交わされた文書の内容を手書きで写し、謄写印刷したものである。会議等で配付されたものと推察されるが、津田一男によるとと思われる興味深いメモ書きがあるため紹介する。

資料六 「市民球場建設費寄附に関する覚書並びに寄附願」

(津田一男資料 仮番号15)

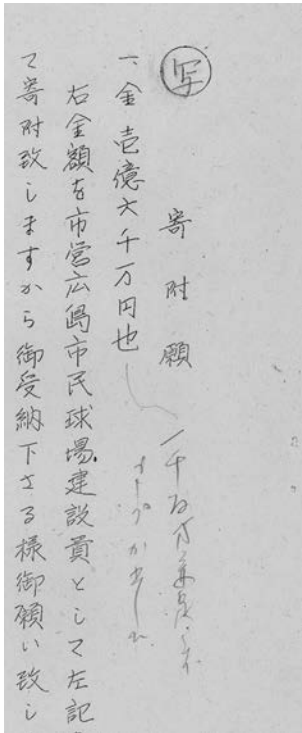


写真3 寄附願(部分)

⑤ 寄附願
一、金壹億六千万円也
右金額を市営広島市民球場建設費として左記条件をもって寄附致しますから御受納下さる様御願ひ致します。

記

- 一、本寄附金は球場建設費に充当し球場建設に付建設世話人会を作り一切を同会に諮らねたい事
- 一、地元球団たるカープ球団に対し之が育成助長を計らねたい事

昭和三十二年一月二十六日

寄附者代表 田中好一 (印)

広島市長 渡辺忠雄殿

このメモによると、二葉会の寄附額一億六千万円のうち一千万円はカープが出したようである。翌三三(一九五八)年に広島市民球場でオールスター戦が開催されるにあたり、三万人収容できる施設への改修を連盟側から要請されたため行われた第二期工事(内野席増設工事)⁽²⁹⁾に関する費用についても次のとおりメモがある。

第二期工事費寄附受納並びに寄附願

⑥ 寄附受納について

広島市民球場建設第二期工事費として、別紙(写)のとおり願出のあった左記金額は、これを受納する。

記

- 一、金六千参百五拾万円也
- 二、三年先がオールスターの関係でカープが実際は出す世話人会の名で借りてカープが支払う

昭和三十三年二月十二日提出

広島市長 渡辺忠雄

第二期工事の改修費用は八、三五〇万円であった。別紙として添付されている「寄附願」は世話人会（二葉会のメンバーで構成）の名前で提出されている。当時の株式会社広島カープは昭和三〇（一九五五）年に二葉会を中心に、総計二〇余人の郷土出身者の寄附的出資によって設立された組織であり、カープの球団社長や代表は二葉会のメンバーと重なっていた。このメモからは球団として緊急に必要な設備に対する支出はカープが負担したことがうかがわれる。なお「二、三年先オールスターの関係で」とあることから、このメモが昭和三三年の改修を指すのか、その後の改修を指すのかは判然としない。別資料による検証が必要であろう。

資料七 『野球界』 第四七号第九号（津田一男資料 仮番号1379）

最後に津田一男資料の中でも多くを占める野球関連書籍・雑誌の中から、『野球界 広島カープ新球場完成記念号』を紹介する。

『野球界』は、博友社刊の野球雑誌であり、明治四一（一九〇八）年から昭和三四（一九五九）年まで発行された。戦後は、昭和二一年に出版が開始されたベースボールマガジン社の『ベースボールマガジン』と並ぶ野球専門雑誌であった。津田一男資料では『野球界』、『ベースボールマガジン』共にまとまった形で保存されている。その中で、広島カープ、広島市民球場にまつわるものが『野球界 広島カープ新球場完成記念号』である。

雑誌の表紙には、当時広島カープの監督を務めた白石勝巳の顔写真が使われている。この特集号では、まず「ヒロシマ新球場完成記念グラフ」と題して、市民球場初の公式戦となった広島対阪神戦の写真、カープの長谷川良平、藤井弘両選手が阪神の田宮謙次郎、吉田義男両選手を市民球場や広島市内を案内するという企画を撮影したものを

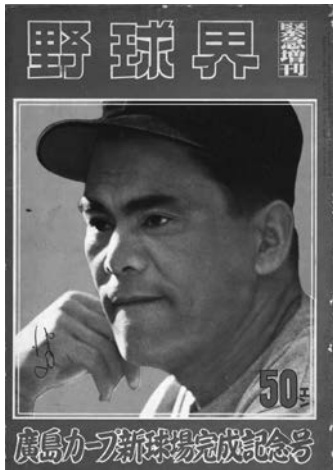


写真4 『野球界』表紙
(昭和32年8月臨時増刊)

が掲載されている。また、NHKで球場落成記念番組として放送された「スポーツ広島の午後」の撮影模様が掲載されており、カープ選手やゲストとして招かれた元松竹監督の小西得郎、阪神の藤村富美男監督や田宮選手、吉田選手の出演が確認できる。続いて「新球場の完成と広島カープ」という座談会には、広島監督の白石勝巳、マネージャーの岩本章良、選手の長谷川良平、巨人軍の川上哲治選手が出席している。白石、岩本、川上が巨人軍でチームメイトだったことから話も弾んでおり、草創期カープの内情や苦労話、巨人軍時代との対比など、内容は大変興味深い。

また、野球評論家の大和球士による「広島カープ そのたどった道」という、カープ草創期の歴史をまとめた文章が掲載されている。最後に、野球どころの広島が生んだ各球団の選手を紹介した「広島出身選手群像」やセ・パ両リーグのスター選手紹介、広島カープ選手の写真付き名鑑などが載っている。

おわりに

本稿では谷川昇資料、河口豪資料、津田一男資料の中から広島野球倶楽部・広島カープの黎明期の様子を伺い知ることのできる資料を中心に紹介した。今回取り上げることの出来なかつた資料の中には、日本プロ野球史においても貴重な情報を含むものも多く、今後多くの利活用が見込まれるものである。末尾ながら、カープ関係資料を寄贈してくださった多くの方々に変更感謝申し上げますとともに、当館では継続してカープ関連資料の収集に努めるので、多くの皆さまのご協力をお願いしたい。

今回の翻刻に際しては、原資料の内容と形を損じないように留意するとともに、特に次のおりの取り扱いを行った。

- 1 漢字は原則として当用漢字に統一した。
- 2 段落・改行は、資料の意図を損なわない限り、適宜整えた。
- 3 句読点は原則として原文のとおりとしたが、読み取りづらい場合は、こちらで加えた。
- 4 明らかに誤字と思われるものは、当該文字のか所にママと記した。
- 5 破損による欠落や資料名等を当館で補記した場合は、「 」で示した。

脚注

- (1) 『社団法人日本野球連盟宛加盟願草稿』(谷川昇資料 仮番号 6、一九四九年九月)
- (2) 広島高等学校野球部百年史編集委員会編『広島高等学校野球部百年史』(広島学園、二〇一二年)、一～二頁
- (3) 『増補 広島市民球場の記憶』(広島市文化財団・広島市郷土資料館、二〇一二年)、一九～二〇頁
- (4) 同註(3)、二〇頁
- (5) 金柵晴海『広島スポーツ100年』(中国新聞社、一九七九年)、一七八頁
- (6) 河口豪『栄光の広島カープ風雪十五年』(恒文社、一九七五年) 一〇～二頁
- (7) 同註(3)、二五～三一頁
- (8) 『カープ五〇年～夢を追って』(中国新聞社、一九九九年、一九九～二〇〇頁)
- (9) 同註(8)、二〇三頁
- (10) 河口豪『カープ風雪十一年』(ベースボール・マガジン社、一九六〇年)、六二～七二頁
- (11) 『中国新聞』、一九六七年十二月十九日付記事
- (12) 『広島県大百科事典 下巻』(中国新聞社、一九八二年)、六二頁
総理庁官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』(日比谷政経会、一九九九年 国立国会図書館デジタルコレクション)
- (13) 中国新聞社編『V1記念 広島東洋カープ球団史』(広島東洋カープ、一九七六年)、一六九～一七〇頁及び「株申込書(創立趣意書、会社目論見)」(谷川昇資料 仮番号7)
- (14) 同註(3)、二三～二四頁及び同註(6)、一〇～一一頁
- (15) 同註(3)、二四頁、『中国新聞』、昭和二四年九月二九日付記事
- (16) 同註(3)、二五頁
- (17) 同註(3)、二五頁
- (18) 『広島市議会史 議事資料編Ⅱ』(広島市議会、一九八七年)、二二〇～二二二頁
- (19) 『中国新聞』、一九五〇年六月二八日付記事
- (20) 同註(8)、一九九頁
なお、一九五〇年八月十二日付『中国新聞』の記事には、福山市が広島野球倶楽部へ七〇万円を出資する際に、福山市会教育、総務連合委員会において「一応了承する。五月三十一日付県ならび県議会あて、五市長連名で陳情した県収入の入場税を一部還元交付する問題の実現を条件」として希望していることが書かれている。おそらく、資料三の「陳情書」の雛形を用いて、五月三十一日に陳情したものと考えられる。

- (21) 西本恵『広島カープ昔話・裏話ーじゃけえカープが好きなんよ』(トーク出版、二〇〇八年)、三〇～三三頁
- (22) 同註(10)、十八～二〇頁
- (23) 同註(21)、三六～四一頁
- (24) 『中国新聞』、一九五一年三月十五日付記事
- (25) 『中国新聞』、一九五一年三月十六日付記事
- (26) 『中国新聞』、一九五一年三月三〇日付記事
- (27) 『中国新聞』、一九五一年三月三十一日付記事
- (28) 同註(3)、六二～六三頁
- (29) 同註(3)、七三頁